

テキストの記述フレーム ——参加者と観察者の範疇を視座として——

野村 真木夫*
(平成10年4月30日受理)

要 旨

人のおこなう言語活動において、あるまとまりをもった表現の具体相をテキストとよぶ。テキストが組織化されるときにどのような要因が作動しており、それを説明するために、どのようなパラメーターを想定することができるのか。本稿は、この問題に理論的な検討をくわえることを目的とする。まず、テキストを「関係・効果・様相」という3つの範疇でとらえることを仮定し、具体的なパラメーターとして、コミュニケーションの組織・テキストの話題・テキストの作動に従属する範疇をさらに設定した。テキストをコミュニケーションのなかに位置づけるとき、参加者と観察者の概念化が重要であるが、本稿では特に観察、および観察者の概念の検討を深める。

KEY WORDS

テキスト	Teksto	関係	Rilato
参加者	Partoprenanto	効果	Efektio
観察者	Observanto	様相	Modaleco

1. テキストをどのような範疇としてとらえるのか

テキストとは、人のおこなう言語活動において、あるまとまりをもった表現の具体相をさす。本稿の目的は、テキストがどのように組織化されているのかをとらえるための理論装置を、事例に即して設定することにある。

「テキスト」に対して「文章」や「談話」という用語がある。文章は書き言葉あるいは文字言語を意味し、談話は話し言葉あるいは音声言語を意味するのが一般的である¹⁾。ここにいうテキストは、書き言葉と話し言葉の両方を包括してさす範疇である。

人のおこなう言語活動においてテキストをとらえるのは、書き言葉か話し言葉かを問わず、現実のコミュニケーションに即して考察することを意味する。したがって、コミュニケーションの時間や場所をはなれて、抽象的にあたえられた言語資料を対象にするのではなく、つねに、言語活動の参加者を介在させて言語表現をとらえる。コミュニケーションは、その参加者によってなんらかの意味が選択され、その選択の結果が再帰的に観察されるという、意味の産出過程を内在する。いいかえれば、テキストの送り手と受け手とが、相互にかかわりあい、それぞれが能動的に表現に言及する過程を意味するのである。テキストを観察するばあいにも、意味の

* 言語系教育講座

産出をおこなうのであり、分析を動態的におこなうのはこのためである²⁾。

まとまりをもった表現をとりあげるとき、次の2つの事項が条件になる。第1に、そこに意味論または言語運用論において選択しうる範疇があること。第2に、着目した部分に対して、同位または従属、重層などの関係にたつ近傍の部分があって、それとの意味論または言語運用論的な相互関係³⁾に応じて、第1の範疇が選択されること。この2つの条件がみたされるとき、はじめに着目した部分がまとまりをもち、また、次に着目した近傍の部分とのあいだでまとまりをみとめることができる。

まとまりは、着目した部分のになう関係に応じて認定することができる。それゆえ、ここでいうまとまりとは、テキストに絶対的な境界のあることを保証するものではない。これは境界がないことを意味するのではなく、むしろそれが過度に多く想定されることによって、テキストをしからしめる要因になりえない、ということである。すなわち、テキストは境界という範疇をもっては条件づけられず、関係をみいだしうることによって規定されるのである⁴⁾。

そのように、テキストに多様な関係性⁵⁾を想定するとき、個々の関係が他の関係性とのかわりにおいて、あるいは他の単位体との関係性において、派生する範疇が想定される。これは、二次的な関係性であり、テキストの単位体の固有の属性に還元できない。これを、テキストのになう効果としてとらえる。

テキストが表現の具体的な相だというのは、あたえられた一つ一つの表現の過程をそのままにとりあげてことを意味する。テキストを分析的にとりあげていく段階で、それを類型化したり、一般化してとらえなおすとしても、その出発点において、あたえられたテキストの個別性やコミュニケーションの一回性を認めるのである。テキストを、組織化されたまとまりとみなすのは、テキストの組織をテキストにみいだされる関係の集合として定義するからである。

コミュニケーションにおいて参加者はテキストに意味を付与したり、テキストから意味を解釈としてとりだすことができるが、ここではそのようなテキストの内容を問おうとしているのではない。問題は、上にのべた関係がどのようにして生じているのか、効果がどのようにして派生するのかという、関係や効果が選択される可能性である⁶⁾。本稿では、これを様相とよぶ。

ここでこれまでの主旨を4つの用語としてまとめておく。

- (1) a テキスト：人のおこなう言語活動において、あるまとまりをもった表現の具体相
- b 関係：テキストの複数の部分のあいだで、意味論的・言語運用論的に選択できる相互依存的な範疇
- c 効果：ある関係が他の関係とのかわりにおいて、あるいは他の単位体との関係において派生する範疇
- d 様相：関係が選択されたり、効果が派生する可能性

2. 言語表現がどのようにしてテキスト研究の対象となるのか

本稿では、テキストとそれをとらえる基本範疇を(1)に述べたように規定する。テキストが問われる理由は、言語表現をコミュニケーションの参加者や観察者の相互作用のなかで考えようとするところにある。すなわち、コミュニケーションを内側からとらえるということである。テキストにみいだされる、関係・効果・様相という範疇は、いずれも、ある唯一の時間と場所において行われたコミュニケーションをつうじてのみ、とりだすことができる。あたえられた

言語表現から産出される意味や関係性は、参加者相互のかかわりあう偶発性に左右されたものである。次の話し言葉のテキスト(2)を例として、(1)にあげた範疇に関して、どのような要因をパラメーターとして導入しうるのか、かんがえてみよう。

- (2) 1 K ウサギはひっかくんだって?
 2 S え、かじるわけ//じゃないの。
 3 K かじるんじゃないくてー、
 4 S んー。
 5 K ひっかくって。
 6 S えーブタは体当たりするよ。
 7 K (1)いたの?=
 8 S =付属にねー、//ブタさんがねー?
 9 K んー。
 10 S 2週目、ぐらい、かな?
 11 K んー。
 12 S 5年生が飼ってたらしーんだけどー、来ててー。
 13 S 1回見にいったのねあたし学年ちがったんだけど。
 14 S そしたらちょーどなんかさん、散歩じゃないや、小屋の掃除かなー、
 15 K んー。
 16 S なんかでブタを出しててー。
 17 S (1)そしたらさー、ブタが走って//さー、
 18 K {笑い}
 19 S 女の子にバーンってぶつかってー。
 20 S (0.5)女の子すんごい//びっくりしちゃってかわいそーだったよ?
 21 K {笑い}
 22 K んー?
 23 S ん。
 24 S ブタの走る音ってさ//ー?
 25 K {笑い}
 26 S ウマのさー//あの蹄の、
 27 K ん。
 28 S トットコトットコ//ってするでしょ。
 29 K {笑い}
 30 K ん。
 31 S あれと一緒になんだよー?
 32 K あ、ブタも蹄あるもんね?=
 33 S =んー。
 34 S でもねー、//そんな音すると思わなかったからー、
 35 K ん。
 36 S //すごい、えウマー? とか思ってうしろをみたらブタが突進してきて、
 37 K えー、そー。

- 38 S {吸気} // 女の子にバーンてぶつかってー。
 39 K {笑い}
 40 S ブタもふっとび女の子もふっとび、
 41 K ん。{笑い}
 42 S すごかったよー。
 43 S あびっくりしたー。
 44 K あ、付属ってなに飼ってるの？
 45 S ブタ。
 46 K ブタだけ？
 47 S あと見たことない。
 48 S わかんない。
 49 K んー。

以下に、コミュニケーションを成立させる要因やテキストにまとまりをあたえる要因をあげ、テキストを記述するフレームとする。個々のテキストや言語現象に応じて、それを特徴づけるパラメーターとして、このうちの任意のものが選択的に運用されることになる。

2.1 コミュニケーションの組織

まず、コミュニケーションの組織の形成に関係性をもつ範疇がある。これらは、テキストがどのような社会的な条件で表現されるのか、具体的なコミュニケーションがどのように運用されるのか、テキストがどのように受容されるのかをとらえるためのものである。

a コミュニケーションの環境

(2)は、筆者の授業科目でもちいるデータの収録のために表現された話し言葉のテキストで、「どんな内容でもかまわない。自由に話していること」が求められている。あらかじめ一定の情報を交換するような目的はなく、この意味で、日常的な会話に準じてとらえることができる。K・Sはならんで着席し、ビデオカメラが2人の正面にあり、小型のマイクロフォンが2個机上にある。収録時間が30分間であることと、収録の目的は了解されている。(2)の部分は、開始時から約18分を経過したところから1分間程度をとりだしてある。

b コミュニケーションの参加者⁷⁾

テキストを表現・受容している参加者がいる。それは、K・Sとした2名であり、教員養成系大学の3年生の女子で、親しい友人関係にある。Kは富山県、Sは福島県の出身である。

c コミュニケーションの観察者

このテキストにはコミュニケーションの参加者のほかに、このコミュニケーションにたいする現実の観察者がいる。まず、この授業科目の他の聴講学生が、参加者の背後で観察している。ほかに、録音・録画機材の操作のために2名が、参加者のななめ前に着席している。テキストの発話は、K・Sの間でのみ交換されており、周囲の観察者とのあいだでの相互作用は、表面的にはおこなわれていない。とはいえ、このことがコミュニケーションの観察者にとって、その参加者になりえないことを意味するのではない。コミュニケーションの観察者は、つねに可能態としての参加者である。また、コミュニケーションの参加者が、そのコミュニケーションの展開を自省的に観察する可能性がある。

d テキストの参加者

このテキストでは、自称・対称で指示して言及されるコミュニケーションの参加者(b)と一致する参加者の他に、他称で指示される参加者が認められる。19S 以下で言及されている「女の子」が主であるが、さらに8S 以下で言及される「ブタ (さん)」, 12S の「5 年生」も参加者としての様相をになっている。ほかに c のコミュニケーションの観察者も d の可能態として認めることができる。

e テキストの観察者

コミュニケーションの参加者に、テキストの観察者という属性を割り当てることができる。それは、参加者がテキストに言及することで規定される。(2)のばあい、たとえば、1K-5K の発話に着目すると、この範囲に「ひっかく」と「かじる」の2つの動詞があらわれている。これは相互にかんがえうるウサギの動作を選択して特定しようとしているのであるが、その選択は排他的におこなわれている。その動作をひとつに特定しようとするとき、参加者は、先行する発話の部分に反復的にまたは否定的に言及することで観察者としてふるまう。

2.2 テキストの話題⁹⁾

テキストで、どのような話題が、どのようにとりあげられて展開されるのかは、テキストをとらえるための要件である。これは以下の3つの項目になる。

f テキストの話題

テキストから話題をとりだすには、発話にあらわれる提題表現とその叙述表現が有効な指標となる。(2)では、表面的に次のものが指摘できる。提題表現と叙述表現の部分を簡略化してぬきだそう。

- (3) 1 K: ウサギ (は)ーひっかく
- 6 S: ブタ (は)ー体当たりする
- 20 S: 女の子ーびっくりしちゃってかわいそーだった
- 24-31 S: ブタの走る音 (って)ーウマの蹄[の音]と一緒にだ
- 32 K: ブタ (も)ー蹄ある
- 40 S: ブタ (も)ーふっとび
- 女の子 (も)ーふっとび
- 44 K: 付属 (って)ーなに飼ってるの

提題表現としてとりあげられる頻度から、「ブタ」の行動や属性が、ここでは主たる話題であり、これに相互に関係性をたもつ話題として「ウサギ」の行動と「女の子」の行動とがあり、さらに関連する話題として「付属」の現状がみとめられる。

g テキストの話題のきりかえ

f で提題表現をとりだしたが、これに着目することで話題のきりかえを指摘することができる。ここでは、1 K・6 S・24S-31S・44K がそれにあたる。

- (4) 1 K ウサギはひっかくんだって?
- 6 S えーブタは体当たりするよ。
- 24S-31S ブタの走る音ってさー (中略) あれと一緒になんだよー?
- 44K あ、付属ってなに飼ってるの?

この4つの部分をふくむ、1 K・5 K・6 S-43S・24S-33S・44K-49K は、それぞれ「ウサギ」・「ブタ」・「ブタの走る音」・「付属で飼っている動物」を話題としていることで、たがい

に区別される。この4つの部分は、書き言葉のトピック・センテンスとおなじ効果をもち、話し言葉においては「トピック・アタランス」として類型化することができる⁹⁾。(3)に列挙した6発話のうち、(4)にとりだした発話は、テキストでの様相が他の発話とことなるのである。

h テキストの話題の展開

(4)のトピック・アタランスは、それぞれ一定の範囲に展開される。まず、1 Kから5 Kにいたる「ウサギはひっかく」ことの話題は、総称指示、すなわち「ウサギ」を集散的に指示し、その一般的な特性を叙述している。5 Kまでの展開は、2 Sが1 Kの総称表現の確認を要求し、Kがその確認の発話をおこなったものである。

つぎに話題を提示する6 Sも総称表現である。「ブタ」に総称的に言及する6 Sの発話は、1 K「ウサギ」への言及と対比的な関係性をもち、この意味で1 Kと6 Sは同格である。ところが、7 Kでは、Sにたいして具体的に指標化しうる時間と場所に即した情報が要求されており、以下、「付属にいたブタ」がおもな話題になる。ここで提供される情報は、Sの経験にもとづくもので、知識の優位性に明確な差があり、これがこの部分でのSとKの発話の質と量とを制約している。すなわち、情報提供の発話はSがおこなっており、この間、Kの発話はいづちの他には同意を要求する32Kだけである。

なお、24Sから33Sは、「ブタの走る音」が総称指示で言及されているが、これは「付属にいたブタ」の話題を展開させるための注釈的な発話連続である。34Sで「付属にいたブタ」の話題に復帰するので、Sの経験への関係性はたもたれている。

この話題が、Sの感想の情報を提供する43Sできりあげられる。44Kでは、それまで場所的な範疇であった「付属」を話題としてとりあげる。Kは「付属」で飼っているブタ以外の動物に関する情報をSに要求し、以下、質問－応答の関係でこの話題が展開される。

(4)にとりだした、トピック・アタランスを規準にして話題のまとまりを規定すると、つぎの4つの部分になる。

- (5) a 1 S－5 K：ウサギがひっかくこと
- b 6 S－43 S：ブタが体当たりすること
- c 24 S－33 S：ブタの走る音
- d 44 K－49 K：付属で飼っている動物

テキストの話題は、このようにテキストのまとまりを明示するひとつの要因として、その組織化に貢献している。

以上、3項にわたって、テキストの話題の展開のしかたをとりだしてきた。テキストの話題を構成する提題表現と叙述表現とは、それぞれ、次のような関係の様式がある。

- (6) ①同一の語句が反復する（「ブタ」、「ふっとぶ」など）
- ②対等の関係にある関連語句が連続する（「ブタ」－「女の子」、「ひっかく」－「かじる」－「体当たりする」など）
- ③階層の関係にある関連語句が連続する（「ブタ」－「ブタの走る音」など）
- ④叙述表現に含まれている語句と提題表現に含まれている語句とが相互に移行する（「ブタ」、「女の子」など）

2.3 テキストの作動

話題はテキストを組織化することにはたらいっている。それでは話題をになったテキストがど

のように作動して、テキストを具体的な言語活動として成立させるのか、その動的な項目を次にとりあげる。

i テキストからの意味の産出

テキストのある部分の意味の産出は、テキストの近傍の部分との関係性において特定される。ひとつの例として、総称表現、すなわち集合的な指示性の主題にたいする特性を叙述する表現類型の発話連続についてみよう。ただし、1 Kに先行する発話は無視するものとする。

- (7) 1 K ウサギはひっかくんだって?
 2 S え、かじるわけ//じゃないの。
 3 K かじるんじゃないくてー、
 4 S んー。
 5 K ひっかくって。
 6 S えーブタは体当たりするよ。

Sによる1 Kの発話の意味の産出は、2 Sの発話との関係において選択されている。すなわち(2S)「(ウサギは)かじるわけじゃないの」という否定命題の確認を要求することによって、(1K)「ウサギはひっかくんだって?」という発話との関係性を特定するのである。1 Kで表現されている総称的な知識は、2 Sの発話の局面では、参加者のあいだで共有されていない。この確認の要求は、動詞「ひっかく」の意味の産出を、具体的な動作の意味記述としておこなうのではなく、「かじる」の補集合に属する動詞として、それを特徴づけるものである。このような意味の産出のしかたは、1 Kの発話があらかじめ内在していたのではない。2 Sの発話の選択によって偶発的に方向づけられたものである。

さらに、6 Sで「ブタは体当たりする」という動作がとりあげられる。6 Sは「体当たりする」を「ひっかく」・「かじる」と区別し、さらに「ひっかく」・「かじる」を「体当たりする」の補集合に属する動詞として規定する。また、その動作主は先行する発話の「ウサギ」ではなく「ブタ」である。このことは、「ウサギ」を「ブタ」の補集合に属する名詞として特徴づけるはたらきをする。こうして、発話1 Kと6 Sの意味が産出される。

j テキストへの言及

テキストの部分が、その先行する近傍のテキストの部分に言及しているばあいが少ない。これはeに述べたテキストの観察者によるものとして規定できる。あらためて、(7)の部分に即して例をとりあげなおすと、2 Sの発話では「かじる」を提示することで、1 Kの「ひっかく」と「かじる」とが相互に区別されるものとして言及している。この言及がiで述べたように偶発的であり、かつ否定的であることから、2 Sの発話は1 Kとのあいだで語彙の結束性を維持するのではなく、逆に、これを逸脱させる様相を示している。このように、偶発性と結束性の逸脱が、iでしめしたように、意味を産出する効果をもたらす。3 K・5 Kの発話は、1 K・2 Sにあらわれた「ひっかく」「かじる」に再帰的に言及することでコミュニケーションを継続させている。

以上のように、テキストからの意味は、発話のサイズにかかわらず、当該の要素から単独に産出されるのではなく、近傍の要素の意味と区別することにおいて偶発的に産出される。このとき、コミュニケーションの参加者は、表現の過程で順序づけられた自分自身の発話とその近傍の発話を観察し、それへ再帰的に言及しながら、自分の発話をおこなうわけである。

k テキストの時間的、場所・空間的な関係

テキストの展開の指標として、時間的な軸と場所・空間的な軸とを仮定する。この軸には、推移するものとししないものとが認められる。

(6)の発話連続に、時間的な推移をみとめることはできない。この(6)と、hで指摘した注釈的な発話連続の24S-33Sの部分は、総称的な言及のしかたであって、時間的な展開からは独立している¹⁰⁾。これらを除いた、7K-23S・34S-43Sには時間的な推移をみとめることができる。

テキストは、7Kの発話で、総称的な指示から唯一的な指示のしかたにきりかわる。この7K以下で、テキストの表現対象には時間的な推移が導入され、Sの経験に即した情報が提供される。7Kは、Sに情報を要求することで、総称表現である6Sの発話内容を、以下で具体的な事例として展開させるという、テキストを組織化する効果をになっている。6Sの総称的な知識は、7Kの局面では、KとSのあいだで共有されておらず、この異質性を内在させた関係によって、Sの経験した事態の時間への具体的な展開が行われるのである。Sの経験の成立した時間は、10Sでマクロに設定される。

このテキストのばあい、時間は単調に系列化されて、発話がその順序に表現されているのではない。34S-43Sの部分は、17S-22Kの部分と時間的に重複しており、注釈的な24S-33Sおよび34S-43Sは、先行する17S-20Sの情報を詳述したものである。ただし、17S-22Kと34S-43Sの部分は、それぞれ時間の順序にしたがって表現されており、発話の順番をいれかえると、事態の意味に変動が生じる可能性がある¹¹⁾。このことがテキストに時間的な軸が導入されていることの根拠となる。

つぎに、場所・空間的な軸についてはどうか¹²⁾。(2)で、総称的な表現による発話の連続、1K-6Sと24S-33Sのまとまりには、時間的な推移が認められないだけでなく、場所・空間的な推移を認めることもできない。(2)では、これを除外した唯一的な言及による部分に、8Sで設定される「付属」という場所の範疇をわりあてることができる。

Sの経験は、Sが付属小学校での教育実習に参加して2週間ほどを経過したときのエピソードとして位置づけられる。

このような時間と場所の範疇が円滑に導入されたのは、「コミュニケーションの組織」の項目で言及したように、参加者SとKとが社会的にコミュニケーションの諸条件を共有しやすい関係にあるからである。

Ⅰ テキストの参加者の関係

kで観察したように、(2)の7K以下の部分において、時間の推移のしかたからとらえると、17S-23Sと34S-43Sの発話連続は重複している。それぞれの部分のまとめにあたる発話のうち、20Sの「(女の子が)びっくりしちゃって」と43Sの「(あたしが)びっくりしたー」は、ともに感情表現として類型化できる。この2つの叙述表現は、()内にしめしたように、感情主がことになっている¹³⁾。「(女の子が)びっくりしちゃって」という叙述表現は、Sによる観察を介してのものであり、「(あたしが)びっくりしたー」はSの内省の自己観察を介しての表現である。このように、テキストの参加者の関係性は一様でない。すなわち、「女の子」は、テキストで言及されるだけの参加者であるのにたいし、コミュニケーションの参加者のSは、テキストの参加者でありながら、そこで表現されている事態にたいしては観察者としてふるまっている。これは、テキストの内部に想定される観察者としての属性である。

hで述べたように、7K-43Sの部分は、Sの経験にもとづく話題の展開である。その経験に帰属する情報の提供は、もっぱらS自身によっており、Sに「テキストの語り手」としての属

性を割り当てることができる。

ただし、同意要求の発話32Kで、KはSの提供する情報を補充しており、Sに対して、Ochs (1997) のいわゆる「共－語り手 (co-narrator)」としての属性をおびている。

以上をようするに、Sには、コミュニケーションの参加者・テキストの参加者・テキストにおける観察者・テキストの語り手、という属性を複合的に割り当てることができ、Kは、コミュニケーションの参加者のほか共－語り手の属性をになう、ということである。

m テキストの類型的な様相

テキスト(2)は、テキストの類型的な特性に関して、どのような様相を認めることができるだろうか。「話し言葉－書き言葉」、「虚構－非虚構」あるいは「小説－詩－随筆－……」といったメディアや文芸史的な表現形態の分類ではなく、テキストの内在する関係性の側面から、いくつかのパラメーターを規定してみよう¹⁴⁾。テキストの類型的な特性は、以下のようなパラメーターが、一定の様相で関係性をつくりだす効果として規定される¹⁵⁾。

- ①時間的な関係性：テキストに時間軸が認められるか、認められないかという規準である。物語のテキストや機器の操作の説明書では時間的に推移する可能性がたかく、概念的な説明のテキストではこれがひくくなる。kの項ですでに指摘したように、総称表現による部分テキストには、時間的な推移を認めることができない。たとえば、(7)の部分がこれにあたる。逆に、12S－20Sの部分は、時間的に推移する関係をもつテキストである。
- ②観察可能性：テキストが、コミュニケーションのどの参加者・観察者にとって観察可能な情報で表現されているか、という規準である。動作や外界の観察の報告は、コミュニケーションの参加者・観察者の誰にとっても観察可能な情報であるが、感覚・感情の表出の報告は自己観察のみが可能な情報である。(2)は、S・Kともに観察可能な情報による表現が基調をなしている。そのうち、たとえば、43Sの「(あたしが)びっくりしたー」は、1の項目で指摘したように、Sによる自己観察を介した表現であるが、Kその他にとっては観察可能であることが保障されていない。
- ③要求性：コミュニケーションの参加者にたいして、情報や行動を要求する関係性をテキストがどの程度内在しているか、という規準である¹⁶⁾。教育的な状況での発話連続や機器の操作の説明書のテキストでは行動を要求する発話や文が基調をなす。(2)のばあい、情報要求・同意要求の発話が認められるが、これらは49発話中6発話にとどまる。ただし、44K以下の部分は、Kの情報要求の発話とSの情報提供の発話とが交互にあらわれており、いわゆる質問－応答ペアの連続になっている。
- ④接触性：Jakobson (1960) のあげるコミュニケーションの構成要素のうち、交話的機能 (phatic function) に対応するものをどの程度内在しているか、という規準である。儀礼や挨拶のテキストは、接触性がたかい。(2)のような会話のテキストでは、あいづちの発話や{笑い}が、すぐれてこの性質をもっている。たとえば、あいづちの反復する22Kや23Sの「んー?」「ん」は、それぞれ、先行する発話の内容を受け入れたことと、発話権を獲得するための、接触の関係性をになっている。
- ⑤参加者の人称性：テキストやコミュニケーションの参加者について、自称・対称・他称あるいは総称の人称がどのように運用されているかという規準である。(2)では、コミュニケーションの参加者は、Sが13Sで自称「あたし」によって言及され、34S・36S・43S・47S・48Sでは、略題であるが同様に言及されている。Kは、まったく言及されていない。その他

のテキストの参加者は、すべて他称として言及されている。

以上、(2)から、その類型的な様相をもたらす5種類のパラメーターをとりだした。これらは、かならずしも2値的に決定される規準ではない。テキストの部分の関係性の様相やコミュニケーションの参加者・観察者の関係性の様相に応じて決定される。

以上のことから、(2)のテキストは、類型的な特性の観点から、つぎのように、全体で5つのまとまりに分節することができる。

- (8) a 1 K-6 S : 一般的な知識の提示₁
- b 7 K-23 S : Sの経験の物語による説明₁
- c 24 S-33 S : 一般的な知識の提示₂
- d 34 S-43 S : Sの経験の物語による説明₂
- e 44 K-49 K : Sの経験についての質問-応答による説明

aとcの部分は、話題になっている動物や動物の属性を、総称的な指示のしかたで言及し、既に獲得されている知識を修正したり(a)、先行する発話に直接表現されていない事態を推論させたり(c)することで文脈を再構成させている¹⁷⁾。このようなテキストは、一般的な知識の提示として類型化できる。

bとdの部分は、過去のある時間にSの観察しえた経験を、時間軸にそってKに報告している。この特性は、物語の一般的な属性をそなえたものとみなすことができる。bとdは、aとcの一般的な知識を、参加者の経験にもとづく具体的な事例としての物語によって説明しているのである。

eの部分の話題は、先行するSの経験の物語の生じた場所に関与するが、その現状の報告を質問-応答のペアでくみだしている。質問-応答によって知識の増加をはかるもので、これも説明の類型に属する。

n テキストにおけるむすびつきの関係

テキストの発話、あるいは発話群が相互に、どのようなむすびつきかたをしているか、またそれらがコミュニケーションやテキストの参加者とのどのようなむすびつきかたをしているかを、意味論的に範疇化することができる。それは、次の4つにおおきく分類される。

- (9) ①時間的な関係：継起、同時、並列、以前、以後、など
- ②場所・空間的な関係：同一、全体／部分、近傍、など
- ③論理的な関係：一般化、類比化、対照、分類、例提示、例外提示、説明、など
- ④心理的な関係：感情的な反応／状態、感覚的な反応／状態、など

(2)に即して(9)の関係のいくつかを例示しておく。

まず、①時間的な関係と②場所・空間的な関係の2つは、言語表現の前後関係にのみ関係する「テキスト内」的な範疇と、言語外の情報に関係する「テキスト外」的な範疇とに区分される¹⁸⁾。

①時間的な関係は、時間的に推移する関係にある7 K-23Sや34S-49Sの部分にみいだすことができる。たとえば、7 K-8 S-9 Kの部分では、質問-応答によって、7 Kの「(ブタが)いたの?」という発話を肯定している。これによって、コミュニケーションの参加者S・Kのコミュニケーションの現在とSの経験した事態であるブタの存在の時間との関係が規定されるのであるから、あきらかに「テキスト外」における関係である。ここには、コミュニケーションにおける発話時以前としての関係が規定できる。また、42-43Sの「すごかったよー。あ

びっくりした一。」は、Sの経験の物語の中心的な事態にたいする評価の表現であり、やはり、コミュニケーションの発話時から観察した、「テキスト外」における関係とみなされる。

これにたいし、たとえば、16S-17S-19Sの部分には「並列-継起」という関係が割り当てられる。これは、テキストの複数の単位体としての発話内容のあいだに規定される時間的な相互関係である。すなわち「テキスト内」における関係である。同時に、この事態はコミュニケーションの参加者としてのSとKの発話時との関係が生じている。この関係は7 K-10Sなどと同様に、コミュニケーションにおける発話時以前としての、「テキスト外」における関係である。テキスト(2)における、Sの経験の物語の部分にはこのように「テキスト内」と「テキスト外」との二重の関係性がみつめられるのである。

②場所・空間的な関係は、7 K-23Sと34S-49Kの部分で同一である。36Sの「うしろ」についても、Sの経験の物語の「テキスト内」における関係である。ただし、8 Sと44Kの「付属」という表現そのものは、コミュニケーションの参加者の立場から指示したわけだから、「テキスト外」における関係である。

このように、テキスト(2)には、時間的にも場所・空間的にも、テキスト外としての関係とテキスト内としての関係の両者を認めることができる。

③論理的な関係は、総称表現の連続である1 K-6 Sなどに典型的にみいだされる。その6 Sから7 Kへの関係も、7 Kが6 Sにかかわる具体的な例の提示を要求する発話であることから、論理的な関係のうち「例提示」の範疇を割り当てることができる。また、時間的な関係での発話連続7 K-23Sから総称表現の発話連続の24S以下への関係は、先行する事態への補足的な「説明」として規定することができる。

④心理的な関係の例は、43S「あびっくりした一」が、すくなくとも34S-42Sの範囲で描写された事態にたいする、Sの「感情的な反応」として認定される。

2.4 ま と め

以上、本節では、言語表現がどのようにしてテキスト研究の対象となるのかを、テキストの組織化にかかわる要因として、14項目にわたってとりあげてきた。これらはテキスト(2)に即しての事例的なあつかいかたであるので、14項目が一般性をもった網羅的なものである保障はえられていない。しかし、多様な類型性を予測しつつ、コミュニケーションの環境からテキストの内部的な展開やむすびつきにいたる考察をくわえるためのパラメーターとして有用なことは、あきらかである。それゆえ、テキストにかかわる問題を提起するための概念として、これらを当面の出発点にすえる。ここで注意を喚起しておくべきことは、先の諸項目が、独立してはたらいっているのではなく、相互に密接にむすびついて作動しており、説明すべき現象に応じて、そのいくつかが有効なパラメーターとして選択的に機能するということである。

3. テキストを類型化するための方法

テキスト(2)は、参加者2名による発話の相互作用によるもので、その主要な部分はSの経験にもとづく物語として類型化することができた。このような、表現類型は「自然な物語(natural narrative)」とよばれ、つぎのように規定される。

- (00) 自然な物語は、われわれの普通の、日常的な会話に生じる物語で、個人的な経験をたが

いに話すものである。人工的な物語は、人工的な言語と同じように、構成された性質を持ち、特定のストーリーを話すコンテキストに生じる。(van Dijk 1974 : 285)

そのようなテキストを類型化するためには、文法形態・言語行為・参加者あるいは伝承者の属性や関係など、形式的な観点からコミュニケーションの組織をとりあげる観点までが想定できる。文法形態によるものとして、Weinrich(1964 : K I), Benveniste(1966 : Ch.19), Kuroda (1973), Fleishman (1990), 工藤 (1995) があり、テンス・アスペクト・人称などが指標である。さらに、Banfield (1982 : Ch.4) は、テンスにくわえて話し手 (SPEAKER) と受け手／聞き手 (ADRESSEE/HEARER) をも基準にする。えられる類型は、工藤 (1995) で代表させるならば、「<はなしあい>のテキスト」と「<かたり>のテキスト」であり、他も大同小異である。

日本の昔話の伝承の研究において、野村純一 (1984 : 54, 172) は、伝承の方法の面からとらえて「語り」と「話」をとりだし、野家 (1996 : 105) は、柳田國男以降の物語に関する議論を言語行為論などに関連づけて検討して、「発話行為・物語行為・書字行為」をみとめる。川田 (1992 : 82f, 272f) は、落語と西アフリカのモシ語による昔話とをとりあげて「はなす・よむ・かたる」という言述化する行為の3つの「位相」を想定する。一方で、意味の側面からみた「情報伝達性・演戯性・行為遂行性」という3つの言語行為の「位相」を規定し、この2つの位相をかさねあわせる。また、発信者の数、伝達の方向と様態、言語行為の観点から発話を類型化する。

このように、多様な観点からの類型化がこころみられているにもかかわらず、テキストの表現類型はただだか2つないし3つに区分されおり、それぞれを特徴づける原理にも共通点が少なくない。しかし、ことの本质は、テキストをいくつに類型化するかということではない。問題は、分類の数や表現類型の種類ではなく、どのような方法で類型化し、類型化された範疇をどのような相互関係としてとらえるかである。

この過程をあきらかにするためには、方法論をすくなくとも二重の観点の指向性としてとらえておかなければならない。1つは、コードを指向するかモードを指向するかという、テキストの組織を決定する方法論的な観点である。それは、おのおのの表現類型を固定化し、あらかじめ領域が設定された2値的な、もしくは規範的な共有のコードの体系としてそれを認定するか、あるいは、テキストがその時々によどのような参加者によって、どのような方法でつくりだされるのか、その関係性に依拠して、相対的に表現類型がきまる、つまりテキストのある局面でひとつの優位性 (dominance) が形成される、と認定するかを選択である。

すでにのべたように、テキストは、複合するパラメーターのくみあわせの様相に応じて類型化される。そのくみあわせは、テキストのある局面でモードを形成し、別の局面ではあるモードから他のモードへの推移を形成する。「はなし」「かたり」などとよばれる類型は、それぞれのモードにおいて、典型的にそれとして認定されるにとどまる。あるテキストが固有にそのいずれかであるとして、特徴づけられるのではない。Bal (1997 : 14) は、物語を「記号的な対象に多様な度合いで影響をおよぼす広範なモード」とみなしているが、これも同様の認識である。

もう1つは、統語論的な範疇をおもな認定基準にするミクロな要因を指向するか、あるいは、テキストの成立するコミュニケーションの参加者と観察者のありようや、メディアのいかに依存するマクロな要因を指向するか、というテキストの属性に着目する方法論的な観点である。これらの要因のくみあわせのいかんが、テキストの表現類型を決定する。これが本稿で様相と

よぶ概念である。個々のテキストが運用される過程において、ミクロな要因とマクロな要因とが相互に作用しあっている。そこにあらわれるパラメーターがどの要因によって優先的に決定されているかは、テキストの任意の部分においてことなる。それらが、さまざまな表現類型を構成し、多様な名称でよばれているのである。要するに、様相の範疇においてモードがきまり、これを類型としてとらえる、ということである。

ここまで検討した方法論を簡略に整理すると、次の2つの指向性のくみあわせとしてとりだすことができる。

(II) a テキストの組織についてどのような決定方法を指向するか

① コードを指向する

② モードを指向する

b テキストのどのような属性を指向するか

① 形式的な属性を指向する

② コミュニケーションの属性を指向する

4. テキストにおける観察者の様相

テキストの分析において、観察者は一般につきのように規定することができる¹⁹⁾。

(12) 観察者：テキストで表現されている事態にたいし、テキストの参加者と一致するかしないかにかかわらず、その事態を他と区別し、その事態に言及する関係性が想定できるシステム。

観察者は、一様に性格づけられるのではない。テキストの外部からおこなう観察とは区別して、テキストの内部に観察という作動が想定されるばあいがある。あるいは、観察の観察という作動が想定されるばあいもある。テキスト(2)の「ブタが体当たりした物語」では、コミュニケーションの参加者の一人Sに、テキストの内部に想定される観察者という属性を割り当てることができた。ここに自己観察という作動が想定される。(2)43Sは、過去の経験としての事態を観察している自分の感情を対象化し、事態の描写とのあいだでの区別を導入した表現である。このような、観察のありようを確認するとき、観察という範疇を、第1階の観察・第2階の観察に下位区分すると、議論をふかめることができる²⁰⁾。第2階の観察とは、ようするに観察の観察ということである。テキスト(2)にそくしてさらに例をとりあげると、13S・36SはSによる過去の経験の物語のなかでのSの観察行為の表現である。物語の中でのSは第1階の観察者であるが、物語の語り手としてのSは第2階の観察者としてそれを描写している。

(13) テキストにおける観察はつぎの2類に区分できる

①第1階の観察

テキストにおいて観察される事態が、その内部に観察という事態をふくまない作動。

②第2階の観察

テキストにおいて観察される事態が、その内部に観察という事態をふくむときにもたらされる、観察の観察という作動。

(14) テキストにおける観察者はつぎの関係の様相で決定される

①コミュニケーションの参加者と一致する／しない

②テキストの参加者と一致する／しない

これまでに述べてきたように、第2階の観察、つまり観察の観察は他者の観察のみならず、自己を観察すること、コミュニケーションの参加者とテキストの参加者との関係性を再構成させることに作動する。このような観察は、常識的な通達のモデルに見るような2者の関係性ではなく、3者の関係性において作動する。この3者の関係は、同時に成立するばあいも、時間をへだてて成立するばあいも想定できるし、また3者のうち2者が同一の参加者であるばあいも想定できる²¹⁾。

テキストは「共一語り手」を成立させ、物語の産出を、関係しあう主体あいだの関係性によって説明すべきであることを理解させる。また、再帰的な観察において、意味の産出はコミュニケーションの参加者がともに行うものである。このとき、言及される事態を現実を経験していることは、関係しあう主体に優位性をあたえるものではなくなる。さらに、観察者が時間の軸に系列化できない情報に言及するとき、物語の形態的な安定性がうしなわれる。このようにして、テキストは、経験の報告と時間の進行という物語の属性を維持する様相が低くなる。物語としての性質が内側から解体されていくのである。

注

- 1) 寺村他編(1990)、佐久間他編(1997)を参照。
- 2) 詳細は、野村(1997)を参照。また南(1997a)を参照。
- 3) ここにおける「関係」の規定は、Halliday(1994²: Ch.7)を参照している。ただし、ここで、想定しうる関係を網羅的に列挙することは、意味がない。本稿においてとりあげる関係性は、想定しうるその一部にとどまる。
- 4) 時枝(1960)は、文章を「語とも、文とも異なった統一構造を持つた一全体である」(12)といい、「文の集合であって、何等かのまとまりを持つた言語表現」(15)と規定する。さらに「文章が、一つの統一体であるといはれるのは、それが何ものも従属せず、それ自身、完全に自立してゐるところから、文とは区別される」ともいう(15)。「まとまり」を条件とすることにおいて、本稿のテキストのとらえかたは、時枝による文章の規定と観点を共有するが、「全体」や「自立」という概念を条件としないことにおいて、それを異にする。
- 5) 「関係性」という語は、Sperber and Wilson(1995²)の理論における「関連性(relevance)」をさすのではなく、より一般的な意味でもちいている。彼らの用語と識別するために「関係性」とよび、対応する英語には'relationality'を想定している。
- 6) コミュニケーションに関して「選択」の範疇を重視したものとして、Halliday(1978)の'choice'と'option'、Luhmann(1984)の'Selektion'、南(1997a)の「選択」という用語をあげることができる。
- 7) 「参加者」という概念について、これまでの研究の動向を簡単に整理しておく。
「参加者(participant)」をとりあげたものとして海外の言語研究では、Jakobson(1957)が初期のもので、語られる事象の参加者(本稿の「テキストの参加者」)と発言事象の参加者(本稿の「コミュニケーションの参加者」)を認めている。これをうけた Hymes(1974: Pt.1)があるが、発言事象の参加者に注目しており、一方、Longacre and Levinson(1977)は、語られる事象の参加者に注目している。近年の概説書においても、Georgakopoulou and Goutsos(1997: Ch.4)は語られる事象の参加者、Duranti(1997)は発言事象の参加

- 者に注目している。この傾向は、同じテキストや談話をとりあげるとしても、研究者のちがいが、言語分析を基盤にしているか、人類学などを基盤にしているかによって制約されているようである。日本語の研究に関して「参加者」をとりあげたものとして、南（1974 a,b), 城田（1998）がある。ともに、Jakobson のあげた 2 種類の参加者に言及している。
- 8) テキストにおける話題とそのまとまりについて詳細は、野村（1986,1987,1992）を参照。
 - 9) トピック・アタランスという概念については、野村（1996）を参照。
 - 10) 野村（1990）参照。Labov and Waletzky（1967）の表現類型では‘free clause’に相当する。
 - 11) Labov and Waletzky（1967）, Labov（1972,1982）を参照。Labov 等の表現類型では‘narrative clause’に相当する。
 - 12) 「場所・空間」の範疇については、山梨（1995）を参照。
 - 13) 寺村 1982 第 2 章を参照。
 - 14) ここで述べる問題は、いわゆるジャンルにかかわる。Hasan（1977）, Halliday（1978 : Ch.7）, Halliday and Hasan（1985）, 中村（1994）, Longacre（1996 : Ch.1）, Georgakopoulou and Goutsos（1997 : Ch.2）などを参照。
 - 15) Kress（1988 : 136）参照。
 - 16) 「要求」の範疇については、国立国語研究所（1987）, ザトラウスキー（1993）, 佐久間他編（1997）を参照。
 - 17) 野村（1993, 1994）を参照。
 - 18) 「テキスト内」・「テキスト外」という用語は、Quirk（1986 : 20）の「テキスト内的 (intratextual)」・「テキスト外的 (extratextual)」・「テキスト間的 (intertextual)」による。Iser（1989 : 251）も「テキスト内的」「テキスト外的」をもちいている。ほかに、「コテキスト」と「コンテキスト」という用語が一般的であるが、Quirk（1986 : 20）は、「コテキスト」をテキスト外の情報（p.40）, 「コンテキスト」をテキスト内の情報（p.38）の意味でもちいている。これは、たとえば Halliday and Hasan（1985 : Ch.5）や Mey（1993 : Ch.9）などのもちいる、より一般的な用語体系の逆であり、まぎらわしいあいまいが生じる。そこで本稿では、より明示的な「テキスト内」・「テキスト外」をもちいる。なお、この問題については、川島編（1994）の“Kotext”の項も参照。
 - 19) 中川（1997）は、文法論の水準で観察・観察者・視点などをとりあげ、かつそれぞれを明示的に定義している。しかし、中川の分析が複文を上限としていることと、彼の議論において、観察者、視点と経験者の関係にかかわる制約がどのような優先順位ではたらいっているのか、十分な理解がゆきとどかないため、本稿では中川の仕事と独立に議論をすすめる。なお中川は、「観察者の観察者」という考え方も提示している。彼は、医者が母親にした発話「痛がるなら、薬をだします」を例として、痛がるのは母親自身でなく、例えばその子供と読めるから、母親は観察者だが、医者はさらにその母親の観察者（つまり観察者の観察者）のようにとれる、と述べている。
 - 20) このように下位区分するのは、Luhmann（1990a : 85f, 1990b : 15f）による「第 2 階の観察 (Beobachtung zweiter Ordnung)」という概念の提案と関係する。Maturana（1978）も参照。
 - 21) テキストにおける観察の問題の詳細は、Fludernik（1996）, 野村（1997, in prep.）参照。

参 考 文 献

- Bal, M. (1997) *Narratology: Introduction to the Theory of Narrative*. (second edition) Univ. of Toronto Press.
- Banfield, A. (1982) *Unspeakable Sentences: Narration and Representation in the Language of Fiction*. Routledge and Kegan Paul.
- Benveniste, É. (1966) *Problème de linguistique générale*, 1. Gallimard.
- Duranti, A. (1997) *Linguistic Anthropology*. Cambridge U.P.
- Fleischman, S. (1990) *Tense and Narrativity: From Medieval Performance to Modern Fiction*. Routledge.
- Fludernik, M. (1996) *Towards a 'Natural' Narratology*. Routledge.
- Georgakopoulou, A. and D. Goutsos (1997) *Discourse Analysis: An Introduction*. Edinburgh U.P.
- Halliday, M.A.K. (1978) *Language as Social Semiotic*. E. Arnold.
- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. (second edition) E. Arnold.
- Halliday, M.A.K. and R. Hasan (1985) *Language, Context and Text: Aspects of Language in a Social-Semiotic Perspective*. Oxford Univ. Press.
- Hasan, R. (1977) "Text in the Systemic-Functional Model." in Dressler, W.U. ed. *Current Trends in Textlinguistics*. W. de Gruyter.
- Hymes, D. (1974) *Foundations in Sociolinguistics*. Univ. of Pennsylvania Press.
- Iser, W. (1989) *Prospecting from Reader Response to Literary Anthropology*. The John Hopkins U.P.
- Jakobson, R. (1957) "Shifters, Verbal Categories and Russian Verbs." in Jakobson 1971 *Selected Writings, vol. 2 Word and Language*. Mouton.
- Jakobson, R. (1960) "Closing Statement: Linguistics and Poetics." in Sebeok, Th. A. ed. *Style in Language*. MIT.
- 川田順造 (1992) 『口頭伝承論』河出書房新社
- 川島敦夫編 (1994) 『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店
- 国立国語研究所 (1987) 『日本語教育映画基礎編 総合文型表』日本シネセル株式会社
- Kress, G. (1988) "Textual matters: the social effectiveness of style." in Birch, D. and M.O' Toole eds. (1988) *Functions of Style*. Pinter.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
- Kuroda, S.-Y. (1973) "Where epistemology, style and grammar meet." in Anderson, S.R. et al. eds. *A Festschrift for Morris Halle*. Holt.
- Labov, W. (1972) *Language in the Inner City*. Basil Blackwell.
- Labov, W. (1982) "Speech Actions and Reactions in Personal Narrative." in Tannen, D. ed. *Analyzing Discourse: text and talk*. Georgetown University Press.
- Labov, W. and J. Waletzky (1967) "Narrative Analysis: Oral Version of Personal Expe-

- rience.” in Helm, J. ed. *Essays on the Verbal and Visual Arts*. U. of Washington Press.
- Longacre, R.E. (1996) *The Grammar of Discourse*. (second edition) Plenum Press.
- Longacre, R.E. and S. Levinson (1977) “Field Analysis of Discourse” in Dressler, W. U. ed. *Current Trends in Textlinguistics*. W. de Gruyter.
- Luhmann, N. (1984) *Soziale Systeme*. Suhrkamp.
- Luhmann, N. (1990a) *Die Wissenschaft der Gesellschaft*. Suhrkamp.
- Luhmann, N. (1990b) *Soziologische Aufklärung 5*. Westdeutscher Verlag.
- Maturana, H.R. (1978) “Biology of Language: The Epistemology of Reality,” in Miller, G. A. and E. Lenneberg eds. *Psychology and Biology of Language and Thought*. Academic Press.
- Mey, J.L. (1993) *Pragmatics :an introduction*. Blackwell.
- 南不二男 (1974a) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男 (1974b) 「現代敬語の意味構造」『国語学』96 (南1997b 所収)
- 南不二男 (1997a) 「ことばを描く」(南1997b 所収)
- 南不二男 (1997b) 『現代日本語研究』三省堂
- 中川裕志 (1997) 「複文における因果性と視点」田窪編『視点と言語行動』くろしお出版
- 中村三春 (1994) 『フィクションの機構』ひつじ書房
- 野家啓一 (1996) 『物語の哲学 柳田國男と歴史の発見』岩波書店
- 野村純一 (1984) 『昔話伝承の研究』同朋社出版
- 野村真木夫 (1986) 「パラグラフにおける文の展開をめぐる」『表現研究』44
- 野村真木夫 (1987) 「現代日本語のトピック・センテンス」『弘学大語文』13
- 野村真木夫 (1990) 「テキストにおける文脈展開の制約——現代日本語総称文を視座として——」『弘前学院大学紀要』26
- 野村真木夫 (1992) 「時間の表現のテキスト的機能」『表現研究』56
- 野村真木夫 (1993) 「『説明』の機能——説明の表現の文脈効果」『表現研究』58
- 野村真木夫 (1994) 「日常的な会話における説明の表現——説明の文脈の組織化と相互作用における機能」『弘学大語文』20
- 野村真木夫 (1996) 「日本語学の対象と方法 文章・文体」『日本語学』15-8
- 野村真木夫 (1997) 「コミュニケーションにおける観察——言語過程説からシステム理論へ——」『上越教育大学研究紀要』17-1
- 野村真木夫 (in prep.) 『日本語のテキスト——関係・効果・様相——』ひつじ書房
- Ochs, E. (1997) “Narrative.” in van Dijk, T.A. ed. *Discourse Studies: A Multidisciplinary Introduction*. vol.1. Sage.
- Quirk, R. (1986) *Words at Work: Lectures on Textual Structure*. Longman.
- 佐久間まゆみ他編 (1997) 『文章・談話のしくみ』おうふう
- 城田 俊 (1998) 『日本語形態論』ひつじ書房
- Sperber, D. and D. Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. (second edition) Blackwell.
- ザトラウスキー・ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析——勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 寺村秀夫他編 (1990) 『ケーススタディ 日本語の文章・談話』おうふう

時枝誠記 (1960)『文章研究序説』山田書院 (明治書院復刊)

van Dijk, T.A. (1974) "Action, Action Description, and Narrative." *New Literary History*.
6.273-294

山梨正明 (1995)『認知意味論』ひつじ書房

Weinrich, H. (1964/1994) *Temps: Besprochene und erzählte Welt*. 5. Auflage. Kohlhammer.

(付記)

テキストの文字化の方法はつぎのようである。

長音は「ー」を使用する。

非言語的な情報は { } 内に記入する。

下降調のイントネーションで発話が終止しているときに「。」を付し、発話中の息つぎを「,」で記す。発話の中断も「,」を記す。

上昇調のイントネーションを?で記す。

沈黙の秒数を0.5秒単位で () 内に記入する。

発話がかさなったばあい、以下の番号の発話が//の位置から開始される。

Priskribaj Framoj de Japana Teksto: Centrante Partoprenantoj kaj Observantoj

Makio NOMURA*

RESUMO

Teksto estas kohera esprimo en nia aktuala aktivado de parolo. Kia faktoro funkcias, kiam ni organizas tekston? Kian parametron ni povas hipotezi, por ni klarigi la funkcion? La celo de tiu ĉi artikolo estas teorie studi la tiu ĉi problemojn. Mi hipotezas ke ni kompreni tekston per tri kategorioj: rilato, efekto kaj modaleco. Kaj mi hipotezas sub-kategoriojn, kio situas sub komunikada organizado, tekstaj temoj kaj tekstaj operacioj. Ni aplikas la sub-kategoriojn al parametroj, kio karakterizas ĉiu tekstojn kaj lingvajn fenomenojn. Fine mi pristudas konsiderindajn konceptojn de partoprenantoj kaj observantoj.

* Division of Languages : Department of Japanese Language